

NPO 釜ヶ崎

野宿生活者の就労機会拡大・居住・生活の安定のために、私たちは努力します。

特定非営利活動法人 釜ヶ崎支援機構 〒557-0004 大阪市西成区萩之茶屋 1-5-4
TEL06(6630)6060 E-mail: npokama@npokama.org <http://www.npokama.org>

2001～2002年釜ヶ崎越冬



釜ヶ崎の越冬

毎年、年末年始は「越冬闘争期間」とされています。1970～1971年の「仲間による仲間の為の越冬対策」として始まり、以後毎年継続されています。今回は、2001年12月25日～2002年1月11日の18日間、第32回目です。主催は、第32回釜ヶ崎越冬闘争実行委員会(釜ヶ崎反失業連絡会等、支援団体7団体による)。

釜ヶ崎は年末年始に仕事がなくなることから、日雇労働者の悲惨や困窮が正月を軸にして集中して表面化します。その上に冬の寒さが覆いかぶさります。そこでこの時期に、労働者たち自身も参加できる形で共に助け合い、そして、野垂れ死にから身を守る闘いを通して、釜ヶ崎における棄民・使い捨て・排除・抹殺の差別構造総体を変革していく質を獲得することを、70年前半の越冬闘争は目的として掲げていました。

「野垂れ死にを許すな」をスローガンに— 12月19日に、越冬闘争支援連帯集会在芦原橋総合福祉センター(大阪市浪速区)で開かれました。基調提案がなされ、「野垂れ死にを許すな!『野宿生活者支援法』の早期成立実現を勝ち取ろう! 反失業闘争を戦いぬいて仕事と住まいを勝ち取ろう!」等のスローガンが確認されました。そして、12月25日に越冬闘争突入集会在三角公園で開かれ、この日より越冬闘争に入りました。

臨時宿泊所 大阪市は、今冬も、「年末年始に仕事が得られないため、自ら食及び住を求めがたい」人への越冬対策として住之江区南港に臨時宿泊所(通称:臨泊)を建設し、大阪市立更生相談所で入所受付を行いました。利用期間は12月29日～1月7日で定員2,800人。今年の利用者数は2,256人(昨年2,217人)で、受付時に飲酒により面接不可能な場合以外は入所が受け入れられました。また、臨泊に先駆けて、12月に入ってから実施された夜間巡回によって施設入所となった人は130人(昨年158人)でした。

臨泊では、3食提供され、また、風呂、洗面・洗濯場、テレビ、娯楽室等もあります。利用者はテレビを見たり、仲間と歓談したり囲碁をしたりと思い思いに過ごせますが、臨泊に入らず釜ヶ崎に残る労働者も多い。「荷物があって動けない」、「わたしには(臨泊は)窮屈でな」、「南港に行くより釜ヶ崎の方が(正月は)おもしろい」など。

布団敷き そんな訳で、臨泊に行かず、釜ヶ崎で踏んばり年を越す労働者のために、毎晩7時半から翌朝5時まで、医療センターの前で布団が敷かれ、労働者に寝場所が提供されました。期間中、1日



大体30～80人の労働者がここを寝場所にしていました。

炊き出し 12月29日から1月3日までは、三角公園が拠点となります。公園内には大きめのたき火が設営され、それぞれのたき火を20～30人の労働者が囲み、期間中は毎日、井や粕汁、雑炊などの炊き出しが行われました。31～4日は毎食出されました。大晦日には年越しそばが出されました。



越冬まつり 31～3日の4日間、三角公園で越冬まつりが開催されました。のど自慢大会、卓球大会、餅つき大会、ソフトボール大会等の催しがあり、また、連日夕方4時頃から音楽イベントが開催されました。31日には、毎年夏と冬に三角公

園で歌っている曾野恵子さんが出演、「釜ヶ崎人情」や「岸壁の母」を歌われ、「また皆さんの顔を見に帰ってきます」との挨拶で終わられました。



人民パトロール 29～3日の連日夜8時頃より、人民パトロールが、労働者の仲間たちと支援者あわせて100名前後で行われました。釜ヶ崎地域内の他、天王寺や日本橋等へと繰り出し、野宿を余儀なくされている労働者に声をかけながら、おにぎりやカイロを手渡して励ましてまわりました。また、野宿生活者の問題を訴える市民ビラも配られました。

道頓堀では、6年前、難波の戎橋で野宿をしていた藤本彰男さんが、若者たちの暴行の末、道頓堀川に投げこまれて殺

コラム ～支援の目から①～

炊き出しをやっていた時のこと。ご飯が一杯盛られた丼と箸を手にしたおっちゃんが、そばにいた私の前で大粒の涙をこぼしはじめた。「ありがとう。これで、もう、いつ死んでもええ。ありがとう。ありがとう」と言いながら…。私は「しっかり食べて、温まってな」と言いながら、おっちゃんと一緒に、ぼろぼろ泣いた。今、目の前にこうしている彼の人生を図り知ることとはとてもできない。けれど、ここにある彼の存在を、全身全霊を、ありのまま受けとめたい。それしかできない。おっちゃんのことは、一生忘れない。私のほうが、言い尽くせないほどのありがとう、だ。

された事件を皆で振り返り、藤本氏を追悼して献花を行いました。さらに、天王寺では、2年前に野宿をしていた小林俊春さんが若者たちに襲撃され殺されており、一同で黙祷を捧げました。

府庁デモ 4日は大阪府に対するデモ。府庁舎までの2時間半、堺筋の道行く市民や仕事始めの労働者たちに、釜ヶ崎の反失業、越冬の闘いの訴えがされました。そして、府庁前に到着後、特別就労事業の拡大、半就労・半保護の実施、職業訓練の実施等、11項目の要求を掲げた



釜ヶ崎反失業連絡会の要求書が読み上げられ、庁舎より出てきた役人に手渡されました。

医療パトロール 毎晩10時頃より、釜ヶ崎の地域内で(3日に1回は釜ヶ崎の

北側、日本橋や難波も)「医療パトロール」が行われました。野宿している人に体の調子を確認しながら、カイロやおにぎり、毛布を渡して回りました。

風邪を引いている人に薬を渡したり、顔色蒼白で体調が悪い人は、救急車が呼ばれます。この越冬期間中のパトロールにより、3名の「路上死」が確認されています。

越冬闘争期間が終わっても、野宿生活者の避けることのできない過酷な寒さとの闘いは続きます。医療パトロールは、「夜回り」として支援団体により継続されていきます。

今年も全国各地の多くの方から衣類、毛布等のカンパが寄せられました。また、学生などのボランティアの人たちも多く集まり、炊き出しや医療パトロールに参加されました。

野宿生活者は釜ヶ崎・寄場固有の課題から、全国的な「ホームレス問題」へと拡大している時代となっています。身近な現場の発見と取り組みを！。

コラム ～支援の目から②～

とても冷え込んだある晩、医療パトロールをしていると、労働者が路上のダンボールの寝床の中で冷たくなり、息絶えていた。彼の最期を悼んで、パトロールの仲間たちで黙祷し、そしてみんなで泣いた。

パトロールのリーダーが言っていた。「私たちは、こぼれ落ちる命を救うことはできない。救えないけれど、寄り添うことならできる。彼らと寄り添い、そして彼らからパワーをいっぱいもらっている」と。こぼれ落ちた彼らの命を、私たちは見守る。そして、彼らの最期を、私たちは忘れない。

コラム 越冬闘争とは

越冬闘争とは、冬との闘いである。冬にたち現れる無慈悲な〈権力〉との闘いである。この闘いのなかで、労働者は、先立つ死者に出会う。死者をとおして〈ナカマ〉に出会う。『いつも』の釜ヶ崎から越冬闘争の『ただならぬ』釜ヶ崎への展開のなかで、釜ヶ崎の意味と社会が、劇的に逆転される。

越冬闘争の主演は、死者である。ついで、野宿者である。野宿者は、死者に接する。涙。そして飛翔。生か死か。一步も後へは引けない。不安と自信。絶望と希望。そして祈りと闘い。越冬闘争は、釜ヶ崎労働者の決定である。力である。文化である。

(青木秀男「生者と死者の対話」、日本解放社会学会編『解放社会学研究2』より)

西成公園に仮設一時避難所開所

昨年暮れ12月25日、西成区津守の西成公園に仮設一時避難所が開所した。運営は、社会福祉法人みおつくし福祉会が行う。

宿泊棟10棟(1棟×22人)、管理棟2棟、共用棟2棟(食堂兼休憩所、自炊場、洗面場、洗濯場、物干し場等)がある。

避難所の施設は、1昨年暮れに長居公園に建設された長居仮設一時避難所とほぼ同じで、プレハブ平屋建て14棟。の食事提供についても長居と同様で、夕方に米飯が1回提供される。

また、入所者には、輪番制で清掃や所



内巡回等の所内作業があり(1日4時間で賃金2,800円)、みおつくし福祉会からの委託により、釜ヶ崎支援機構のスタッフが所内作業をともに行うほか、運営の補助を行っている。

1月26日現在で30人しか入所しておらず、大部分がテント生活を継続している。野宿生活者が入所を選ばない理由はいろいろ考えられるが、定着してしまったテント暮らしから避難所に移ることの窮屈さや、荷物があって動けないこともあるだろう。

また、長居公園よりも、より釜ヶ崎に近いことが影響していると考えられる。入所者の平均年齢は、長居公園よりも高いし、釜ヶ崎との付き合いが長い労働者が多い傾向を示している。

今後、入所者が増えるに従い、長居の避難所や自立支援センターと同様に、ここでも出口問題が問われることになると思われる。

福祉相談部門から ～NPO事務所に訪れる2人～

いつのまにか、NPO事務所にやってくるのが、2人の日課になっていた。

①Mさんのこと Mさん(62歳)は、毎日、朝の6時頃から、NPO事務所のシャッターの前で膝を抱えて座って待っている。冷え込む朝に、痛々しい。12月のある日、ある労働者は、私に言った。「Mさんな、昨日も今日も、朝早うから事務所の前で震えてるんや。なんとかしたって。」確かに、でも。

これまで何回も、彼を傷つけぬように言葉を選び、「朝の8時に来てね。早く来ても誰もいませんよ」と伝えた。しかし、次の日に本人に会うと、「今日は、朝の5時に来て、待っていました」と言う。「事務所に来たら、ひょっとしたら、誰かいるかと思って…」いやー、さすがにそんなに早く出勤できないんですけど…。

②Fさんのこと 彼(66歳)は、01年4月、「仕事探しに行くわ」という言葉を残して忽然と姿を消してしまった。心配して探し回ったが、彼の姿はどこにも見つからなかった。

第一印象は、「おっとり」「ほっこり」「まったり」といった、「癒し系」(?)のおじさんなのだが、仕事への思いは熱い。「片付けの仕事、無いか、何もなければ、ダンボール集めでもするわ。」と、すこぶる就労意欲が高い。「なんもせんと、体が鈍ってしゃあない。」

以前は、恵比寿町駅周辺で野宿していた。体調を悪くし、見かねた仲間が「この人、なんとかしたって」と連れてきたのが始まり。友達が多く、釜ヶ崎を歩いていると、よく声をかけられる。友達が多いんですね、という、「人の名前、忘れてまうからな…」物忘れが多くなったという彼の悩みはけっこう深刻なようだ。実際、生活保護を受給しているということを忘れてしまいうらかった。「ドヤ代、いつまで入ってるんかな」(→月極めで家賃を払っているから大丈夫。)
「仕事が無かったら、アオカン(野宿)でもするしかしゃあないわ。」(→保護費は毎月支給されますよ)

彼の心の中は心配事だらけだった。

失踪して約2週間後、保護廃止になった彼の部屋を片付けにいった。殺風景な部屋にはスポーツ新聞と、わずかの着替えと風呂道具だけが残されていた。

③再びMさんのこと 事務所に飾られた彼のポートレートの余白には、「ダンディM」と書いてある。一見クールでハードボイルドな佇まい。しかし、Mさん、実は、人とおしゃべりするのが大好きな「寂しがり屋さん」。ボランティアさんが一人も来ない日に、「小うるさい奴らが、いなくて、静かでもいいねえ」なんて、憎まれ口をたたいたりもするけど、ボランティアの皆さん、この言葉を真に受けて、傷ついたり悲しんだりする必要はありませんよ。だって、ほ

とんど毎日「今日は誰が来ますか?」と訊いてくるのだから。心の内では「早く、誰か来て、僕に話しかけてくれないかな…」と思っているに違いない。

④さらにMさんのこと 「初老期の痴呆」とばかり思っていた私たちは、T医師の診断に、目からウロコを落とす。「自動車が好きなのに免許取得を反対されたという証言や、彼の雰囲気からも、痴呆ではなく、知的な障害を持っているものと思います。」

今は、療育手帳を取得し、長橋の西成障害者センターのデイサービスに通所している。彼の希望は「作業所」なのだが、高齢の彼に作業所・授産施設などは狭き門。今も仕事をしたいという希望を持っているが、デイサービスのスタッフが細やかな配慮をしてくれることもあって、毎日「学校に行く」ことを楽しみにしている様子。

⑤もう1回、Fさんのこと 夏のある日、彼は、ひょんと現れた。3ヶ月ぶりに再会した彼は、こざっぱりとした身なりをしているのだが、こけた頬と手の杖は、5年も経ったような錯覚を覚えさせる。

「仕事を探しに行って、アオカンし、気が付いたら病院にいた」と言う。脳梗塞だっ

たが、幸い軽度だった。大和中央病院に入院し、2ヶ月たってようやく外出できるまでに回復した。その後、T病院に02年1月までそこで過ごした。退院し、2度目の生活保護の申請をした。

1月の日曜日、H市の病院に入院している人に、荷物を届けなければならなかった。退屈で死にそうな顔をしているFさんを、「一緒にいきませんか」と誘った。

Fさんは優しくかった。お金がなくタバコが買えない、という入院患者のために、ポケットからごっそり10本くらいのタバコを差し出し「入院は退屈や。わしも長いこと入院してたからな。今はしんどいかもしらんけど、がんばりや。」「今退院してもええことないで。仕事はあれへん。あんた、66歳ならわしといっしょや。生活保護もろたらええで。」Fさんに、すこし感動した。

帰りの電車で「さっきは、かっこよかったですね」と声をかけると、Fさんにはこっと笑みを返した。電車がカーブを曲がる。ガタンゴトンという音が大きく響いた後に、Fさんは「ヒマやな、仕事ないかな」と言った。

⑥さらにさらにMさんのこと 「仕事がしたい」というMさんのNPO事務所

NPO釜ヶ崎主催 **「懐かしい映画を楽しむ会」**

第1回 2月7日(木) 会場：西成市民館

「男はつらいよ！ 寅次郎 忘れな草」

継続的にやっています。手伝ってくれるボランティアさん大募集！

お問い合わせは・・・NPO釜ヶ崎 福祉相談部門

電話：06(6630)6061 担当：三浦まで

での仕事。朝の事務所の掃き掃除。「いつも、本当にありがとう。」とお礼を言うと、彼の口はハート型に緩み、「ほほほっ」と微笑む。一時の晴れ間。しかし、長くは続かない。

彼の若い頃からの放浪癖は、今でも時折、頭をもたげる。彼の創作ノートには漂泊の想いというテーマが、様々に変奏され、繰り返されている。関わりだした当初は、姿を消したMさんを探しに行くことが、しばしばあった。何かのトラブルがあると、彼は新たな居場所を求めて旅に出る。「仕事で誰かの役に立っている」ということで、辛うじて身の置き所を見つけられるようだ。

私たちは、彼の「所在無さ」を埋め合わせるような「役割」を用意できない。「いくら本人が希望しても、60才以上の障害者の作業所の枠は無いんです」と福祉事務所は言う。

彼は時々「ぼくは、ほんっとうに、役に

立たない人間です」と言う。「謙遜なんかじゃなくて。」

FさんとMさんは日曜日もやってくる。軽度の物忘れのため、今日が何日の何曜日か忘れてしまうのだろうか。というよりも、「誰かと居たい、誰かとおしゃべりしたい」「仕事がしたい」「自分がここに居ていいんだという実感が無い」といった実存の問題に、曜日は関係ない、ということか。

日曜日のボランティア 大募集！

Mさん(62才)・Fさん(66才)と
日曜日を過ごしませんか。

求む、話し相手・散歩のお付き合い等してくれる方

詳しくは…NPO釜ヶ崎

福祉相談部門

電話：06(6630)6061

担当：ホンマまで。

新しい取り組み—技能講習の始まり

釜ヶ崎支援機構は、大阪市から委託を受け、当面、3ヶ所の各自立支援センターや2ヶ所の公園内避難所の入所者を対象に、就職情報の提供や技能講習、そして、企業に働きかけての求人開拓などを行うことになりました。

このようなことを開始するのに相応しいスタッフがいるというわけではないのですが、「出口問題」解決の一助になればと、取り組むことにしたものです。ありがたいことに、各方面の方から、技能講習の講師についてご協力をいただける目処もたち、何とか講習は「形」になりそうです。難点は、「予算不足」。奨学金どころか交通費も出すことができません。参加希望者が続くかどうか。また、講習後の職探しが具体的に実るかどうか。入所者は常に「せかされて」いますからペースがあうか？

釜ヶ崎の街を訪れる人々

釜ヶ崎支援機構には、しばしば日本各地から、時には海外から、現地視察や学習等の目的で人々が訪ねてこられる。あいりん総合センターや三角公園、あいりん臨時緊急夜間避難所、特別清掃事業詰所等を案内して、釜ヶ崎の街歩きのお手伝いをする人も多い。

昨年11月には、栃木県那須郡西那須野町の専門学校アジア学院のアジアやアフリカからの研修生の方約20名が訪問された。彼・彼女らは、話を真剣に、そして熱心に聞き、各人が何かを感じ取って帰っていかれたようだった。そして後日、「訪問で学んだことは一人一人にとって貴重なものとなった」という礼状を頂いた。

また、同じころ、三重県阿山郡伊賀町の拓殖中学校から、2年生の生徒さん8人が釜ヶ崎を訪れられた。

彼らもまた、釜ヶ崎での出会いの中から多くのことを学びとったようで、11月17、18日の学校の文化祭で、学習したことについての掲示や舞台発表をしたそう。後日、頂いた生徒さん全員からの礼状に、次のような感想が書かれていた。

「野宿生活者の現状が分かり、社会勉強になった。」

「こんなにいっぱいホームレスがいたなんて…とびっくりしました。」

「初めて西成を訪れて、あんなにも

多くのホームレスを見ました。難波や梅田などと空気が違い、戸惑いました。

『大好きな大阪にもこんな地区あるんや』と思いました。これまで野宿者問題をこんなに真剣に考えたことはありませんでした。これから自分たちが取り組むことを見つけていきたいと思えます。」

まだ釜ヶ崎の街を歩いたことのない人や、何となく「怖い」というイメージがあつて近寄ったことのない人、一人でも多くの人に釜ヶ崎を訪れて欲しい。そして、街の姿を見て、現状を知り、いっぱい感じて欲しいと思う。そこから得られること、学ぶべきことは、お金では買えないとても大きなものであると思う。

11月23日 日英シンポジウム (報告)

11月23日(金)に、日英シンポジウム～すべての人が尊厳をもって共に暮らせるまちづくりをめざして～が、大阪ワールドトレードセンタービルディングで開催された。主催は、日英高齢者・障害者ケア開発協力機構日本委員会、ブリティッシュ・カウンシル、及び日英シンポジウム2001大阪実行委員会で、釜ヶ崎支援機構も実行委員会に加わった。

このシンポジウムは、「すべての人が尊厳をもって共に暮らせるまちづくり」がテーマであった。平成12年12

月に、厚生省が「社会的な援護を要する人々に対する社会福祉のあり方に関する検討会報告書」を発表したが、その取りまとめの際に厚生省社会・援護局長であった炭谷茂氏が基調講演を行った。炭谷氏は、社会福祉の諸問題として、野宿生活者や残留孤児問題、中高年のリストラによる生活問題等を取り上げ、これらが解決されない理由として、地域・家族の機能や終身雇用制度が崩れてきたことや、法律が増えても行政は法律を施行するのが精一杯で、法律の間隙を埋めるサービス等を提供する努力ができないこと等を指摘した。そのような中で新たな理念「ソーシャル・インクルージョン」（全ての人々を援護し社会の構成員として包み支え合うこと）の必要性を訴えた。

また、イギリスのアンドリュウ・モーソン氏（CAN=コミュニティー・アクション・ネットワーク創設者・常務理事）及びポール・ブリッケル氏（ロンドンニューハム区長、ブロムリ・バイ・ボウ・センター所長）より、イギリスでの民間の先進的な取り組み事例として、CAN（社会起業家のための学びあいと助け合いのネットワーク。コンピューターネットワークを通じて、福祉の市場の開拓や情報やサービスの交換等を行う。福祉を扱うがややビジネス寄りである。）が紹介された。

その後、日本側4人とイギリス側4

人がパネリストとなりシンポジウムに入った。森田洋司氏（大阪市立大学大学院文学研究科教授）より大阪の野宿生活者の現状について、北口末広氏（近畿大学人権問題研究所教授）より部落差別の現状についてそれぞれ報告された他、ピーター・トムソン氏（CAN国際・教会関係担当）より国際活動の視点で、ロビン・ローランド氏（リンクス・ジャパン顧問、UK-Japan21世紀委員会委員）より企業の貢献の視点で、それぞれスピーチがあった。ディスカッションでは、「ロンドンのスラム対策として、住宅会社に言って新しい住宅を建てさせるなど、密集問題を解決する必要がある。そのためには情報や経験を共有することが大事である」（ブリッケル氏）、「近年、社会で広く活動する者と起業家が話し合いをするようになり、社会資本と企業資本が一体となった『第3の道』が展開されてきている」（モーソン氏）、「CANがうまくいく理由として、制度よりも人のニーズを考えていることや、行動力を大事にしていること、様々な資源を広く活用していること等がある。なお、基本理念はあくまで社会的弱者に対する人間愛で、日本でも日本の実状に合ったCANができればよいと思う」（炭谷氏）など、意見交換がなされた。

12月16日 会員の集い(報告)

12月16日(日)に会員の集いが事務所2階で開催され、15名が参加した。

○最近の「法案」の動き

「ホームレスの自立の支援策等に関する臨時措置法案」に関する最近の動きについて、山田理事長より報告があった。

第153回臨時国会で「法案」が審議されたが、公明党の反発により与党内で意見がまとまらず、結局、継続審議となった。

○労働者の福祉について

労働者の福祉や介護等の諸問題について意見が交換された。

「生活保護を受給しながら特別清掃の仕事に来る労働者がいるが、彼らはお金ではなく、仲間と一緒に仕事をす

ることで『ほっとする』と言っている」、「生活保護を受けるようになった人は、寿命が短くなってしまいうように感じる」などの意見が出た。

○労働者の就労面について

労働者への就労提供の事例等、就労面について話し合った。

長居緊急臨時避難所の利用者に、公営住宅の清掃作業の仕事を出したり、西成公園のシェルター(この時点で建設中)について、所内作業をやる希望者を募ったりしている。特別清掃事業にしても、これまでに手の届かなかった部分の仕事を行い、民間の業者等とはすみ分けている。また、最初は現場先の相手方に拒否されることも多かったが、実際にやって成果を見せていくうちに徐々に受け入れられるようになった。

夜間宿所アンケート報告—2002年2月12日実施

夜間宿所で久しぶりにアンケート調査を実施。当日、整理券発行枚数600枚、午後9時現在利用者数579名で、回答数は247名(回答率42.7%)であった。平均年齢55.6歳(2001年3月56.4歳、2000年5月55.2歳)。

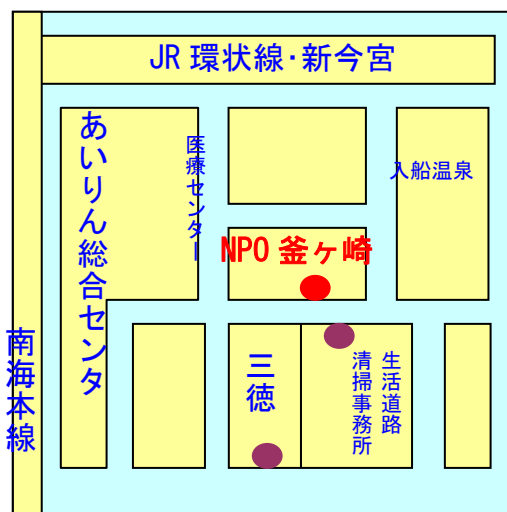
釜ヶ崎にきて1年足らずの人が8.5%となっている。3年未満では21.1%だ。釜ヶ崎への新規参入は相変わらず止まっていない。最も占める割合の高い3-7年(17%)は、釜ヶ崎で仕事が若干回復した、阪神淡路震災後の時期。2位の10-15年(16.2%)は「バブル」末期。

在釜と野宿期間一致している(釜ヶ崎に来てすぐ野宿)が7年未満で42名(19.5%)。1年未満は14名、不況厳しい釜ヶ崎に、まだまぎれる余地を求めて移住してくる傾向が止まっていないことを示している。在釜より野宿期間が長い人が3名確認されたことがそのことを如実に示しているように思われる。直前職として建設土木以外の職種・産業が増える傾向を示している。

2001年度第4回会員の集い 2月17日(日)午後2時より・事務所2階

釜ヶ崎支援機構が関わる仕事が幾つか増えました。

ひとつは長居公園内の臨時仮設避難所と同じものが西成公園にでき、長居公園と同じようにスタッフを派遣しています。いまひとつは、技能講習です。課題満載で出だしも滑らかではありませんが、なんとか収入につながる「職」に結びつくよう、参加者と共に頑張りたいと思っています。そんな近況報告を・・・。



夜間宿所で死亡事故

あいりん臨時緊急夜間避難所で初めての死亡事故がありました。1月30日のことです。

6時の開門直後、3号棟東端の階段の下で一人倒れているという連絡があり、確認すると同時に「119番」に救急車の出動を要請。救急隊員は呼吸が止まっている、と言い、救急車でとりあえず呼吸の回復を図る措置をとった。その後、杏林病院に搬送。

死亡事故の可能性が強いと考えられたので、西成署に届け出た。救急車からも事故報告があったようで、直後に、現場検証が行われた。

その後明らかになったところによれば、鶏の肉をのどに詰め、呼吸困難となって階段の中ほどから下まで転落したもののようだ。

年齢・氏名は不明のままだが釜ヶ崎では入れ歯を入れられない人が多く、空腹とたんぱく質の補給を考えて、口の中に入れたものが喉に詰まったと想像される。釜ヶ崎の仲間に入れ歯が容易に入れられる環境を。

特定非営利活動法人 釜ヶ崎支援機構 会報 9号 2002年1月31日

〒557-0004 大阪市西成区菟之茶屋1-5-4

電話 06(6630)6060 FAX06(6630)9777

会費・寄付の振込口座:郵便振替:00900-1-147702 釜ヶ崎支援機構

福祉部門への振込口座:UFJ銀行菟之茶屋支店(普)1114951 釜ヶ崎支援機構